

## 留学生センターの過去・現在・未来

留学生交流センター長 坂 東 義 雄

現在国会で審議中の来年度予算案の成立を受けて、鹿児島大学待望の留学生センターが、平成12年4月から発足する。平成6年度に、国際交流委員会が、留学生センターの設置について大学院問題等検討分科会で検討したい旨の報告をまとめて以来、すでに6年近い歳月が経過した。この報告を受けて、大学院問題等検討分科会の国際交流作業グループで検討し、原案が作成された後に、鹿児島大学の将来計画委員会、評議会の議を経て、平成8年度の概算要求が出されてからの歳月を数えても、4年半にもなる。この間、鹿児島大学で学ぶ留学生の数は大幅に増え、今ではアジアを中心に世界の国々約40カ国から300人を数えるようになっている。このように毎年増え続ける留学生への対応として、本学では日本語課外補講の充実、短期国際プログラムの開発、修学・生活上の指導助言体制の整備、住宅環境の整備等さまざまな試みを行って来たが、留学生に関する業務は増加し、その内容も複雑化する一方であるため、平成11年1月には、学内措置により留学生交流センターを発足させた。

留学生交流センターは、「外国人留学生に対する日本語教育、修学・生活上の指導助言、日本人学生への留学情報の提供、地域社会における留学生交流の支援及び関係領域の調査研究等の活動を通じた国際理解の促進を目的とする。」という設立の趣旨の下に、この1年余りの間、本学で学ぶ留学生のために、日本語・日本文化の教育、学術交流協定を締結している外国の諸大学等との短期留学交流、留学生への指導助言等の相談活動、さらに国の内外での鹿児島大学の紹介活動や本学の学生を対象にした留学情報の提供活動など、さまざまな活動を行って来ている。中でも、平成11年4月と10月に、それぞれ新しく来学した留学生を対象にして行った鹿児島での勉学と生活についてのオリエンテーション、ランチパーティ、日本語補講のオリエンテーションの催しや、同年10月に66人の留学生と教職員合わせて70人を超える参加者を得て実施した1泊2日の長崎への実地見学旅行は、関係教職員のかたがたの周到的な準備や献身的なご尽力もあって、留学生から幸いにも大変好評を得ることができた。また、11月には、本学の学生を対象にして、学術交流協定大学への短期留学推進制度による留学生募集に合わせて留学説明会を行い、留学情報の提供活動を行った。短い準備期間ではあったが、最近の学生の留学志向にマッチして、約50人の参加者を得て好評であった。

これらの活動の詳しい内容の紹介は本冊子の別項に譲るが、現在の留学生交流センターのこうした諸活動は、10人の兼任のセンター教官と学生部留学生係の職員、そして活動内容によっては留学生のチューターをつとめているボランティアの学生などによって支えられている。留学生にかかわるこのような教職員や学生は、鹿児島大学で学ぶ留学生の人たちの安全で有意義な留学生生活を願って、いつも誠心誠意の努力を傾けている。しかし、年々増え続ける留学生に対して、本学がさらに充実した留学生教育等の活動を持続的・系統的に推進していくためには、センターの専任教官の配

置とセンターの活動を支える事務組織の整備充実、さらに施設や予算の充実などは、不可欠の課題であった。このような意味からも、省令による留学生センターの設置及びこれとともに認められることになった留学生課の新設は、本学にとって大変意義深いことと言える。

平成12年4月に設置される予定の留学生センターは、4人の専任教官（教授定員4）が配置され、日本語・日本文化教育部門と留学生指導部門の2部門からなっている。前者の部門には、大学院入学前予備教育担当と日本語・日本事情担当の専任教官がそれぞれ配置され、後者の部門には、留学生指導担当の専任教官が配置されることになっている。そしてそれぞれの専任教官によって、大学院入学前予備教育担当は、大学院入学前の留学生に対して日本語予備教育を実施したり、予備教育用教材の開発を行うことなどが計画され、日本語・日本事情担当は、学部学生を対象にした日本語・日本事情教育、研究生・大学院生を対象にした日本語教育、日本語日本文化研修生を対象にした上級レベルの日本語・日本事情教育などを行うことが計画されている。これらの教育の一環として、留学生の立場や日本語のレベルに応じて、日本語や日本文化のより深い理解を目標にした日本事情教育を実施したり、日本文化の特別講義や実地研修など留学生にとって魅力ある活動を行うことも予定されている。また、留学生指導担当は、留学生や日本人学生を対象にした異文化理解教育、地域のボランティアや国際交流団体との異文化交流事業、留学生へのカウンセリング活動、帰国留学生への情報提供などのアフターケア活動、さらに本学学生に対する留学相談事業などを行うことが計画されている。

新センターの発足によってこれらの計画が実現すれば、本学の留学生教育と留学生への支援システムは、質量ともに格段に向上することになるだろう。しかし、これらの計画の実現は、もとより、新センターの専任教官のみの努力によって期待できるものではない。学内共同教育研究施設として、留学生センターの運営にあたる各学部、大学院連合農学研究科及び保健管理センター等の委員、留学生教育と留学生への支援に理解のある兼任教員、さらに留学生課等の職員などの共同の力によってこそ、一人ひとりの留学生に、従来にも増してきめ細かに対応することが可能となる。こうした共同の力によって、鹿児島大学待望の留学生センターがその所期の目的を実現するとともに、アジア・太平洋に開けた南の拠点大学としての鹿児島大学の留学生センターが、地域の自治体、教育研究機関、民間の国際交流団体等とも協力しながら、そう遠くない未来に、この地域における国際交流の一大拠点となることを願ってやまない。